

「復活についての問答」

2015年11月27日

ルカによる福音書 20 章 27 節～40 節。さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がいないまま死にました。次男、三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」そこで、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」と言う者もいた。彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。

サドカイ派の人々は貴族階級で、ローマ支配を甘受する現実容認の立場であった。彼らは見えない復活や天使を信じなかった。その彼らが主イエスに復活の愚かしさを問いかける論争を仕掛けてきた。7人の男兄弟の長男が妻を迎えたが、跡継ぎを残さないで死んだ。その場合、弟が兄妻と結婚し、兄の跡継ぎをもうけるレビレート婚(兄弟逆縁婚)というしきたりがあった。弟たちは兄嫁を妻としたが、跡継ぎをもうけずに次々に死に、妻だけが残り、最後にその妻も死んだ。復活した時、7人の兄弟と結婚した彼女は誰の妻になるのか。あり得ない話ではあるが、復活は、このような愚かな信仰であると言った訳である。

主イエスはサドカイ派の人々の問いかけに三つのことを挙げて答えている。①次の世で、復活するにふさわしいとされた人々はめとることも嫁ぐこともない。死ぬこともなく天使に等しい者である。復活に与る者は神の子だからである。②死者の復活については、モーセが『柴』の個所で、「主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と呼んでいる。族長たちはモーセの何百年も前に死んでいるが、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という言葉から、彼らは神の命に与って生きている。ルカ福音書 16 章に、アブラハムが天国の宴席に迎えられている姿も描いている。③ 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。全ての人は神によって生きているからである。人間は時間の中に生きているので、生と死を区別して考えるが、神は永遠に生きている方なので、生死を超えている。「生きている者の神」とは、死をも超えて生かしてくださる神と理解していいのではないか。神の前では、人は皆、生きる者とされているからである。見えるもののみに固執するサドカイ派の人々に永遠の神、その神に基づく復活の命を語って、論破された。彼らは「先生、立派なお答えです」と感嘆し、その後、問いかける者はいなくなった。

死後のことは誰にも分からない。主イエスの言葉を信じるか信じないかである。信じる者には、死は恐怖や空しく無に帰することではなく、神にまみえ、親しい人々と再会する希望となる。信じる方が、死も望みとなり、今を楽しく生きることができよう。